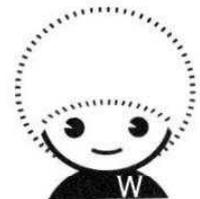
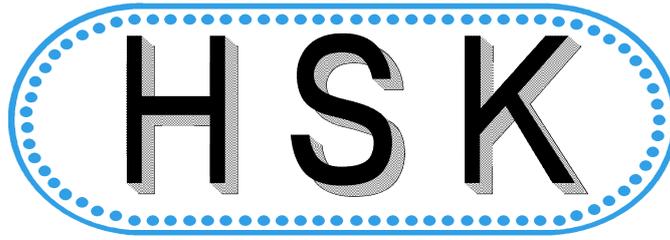


H S K 毎月十回 (一・三・五・八・十・十三・十五・十八・二十・二十五日) 発行  
一九九四年八月四日 第三種郵便認可



# 季刊わたぼうし

NO.72  
07冬

連続学習会  
私はこう生きたい II

## 今回の目次

※連続学習会・「私はこう生きたい II」	2
講師 自立生活支援センター富山 所長：平井 誠一さん 事務局長：浅木 裕美さん	
※第14回はくい福祉まつり	5
※「ミナ・クル」バリアフリー探検報告	
・「ミナ・クル」探検隊	6
・「ミナ・クル」について感じる事	6
・桶屋さんと車いす体験 (2006年10月2日)	
	本田 雄志 7
※富山ライトレール「ポートルム」乗車報告	8
※読者企画・食べ物談話	
・「食」とは「人を良くする」こと	
	秋本 信子 9
※マイ・ブックスルーム	
・たった一度の人生だから	10

支持率が

どうであらうと

首相の座

窪田 比呂雪



この機関紙は障害のある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

# 連続学習会

## 私はこう生きたい II

期 日：2006年6月3日(土)  
場 所：青山彩光苑多目的ホール  
講師：自立生活支援センター富山  
所 長：平井 誠一さん  
事務局長：浅木 裕美さん

**この講演内容は、編集責任者の桶屋が「施設から地域へ」を目的に企画した学習会です。初めての企画でしたので課題が出てきましたが、少しでも皆さんの参考になっていただければと思い、前号に引き続き掲載させていただきます。(桶屋)**

### 前号のあらすじ

施設を出て就職された方が、就職してわずか3ヶ月で脳性麻痺の2次障害が原因で歩けなくなり、頸椎の手術をしないといのちが危ないという状態になりました。

富山市内の病院で手術をしましたが、経過が思わしくなく、2回目の手術は生命に関わる手術をしなければならぬのです。この方は身寄りもなく、保証人をどうするかなどいろいろな問題が出てきました。

自立生活支援センター・病院・行政・ケースワーカーなどがネットワークを作って手術の支援に関わって行くまで掲載しました。」

**平井さん**：「手術が失敗しようと、成功しようと」それについてくる人間関係みたいなものがなく、彼自身が困るわけで、まず自分がどうしたいのか？ もう少し、いろんな人たちに訴えたらどうか？ということと、自分の信頼できる人を病院の保証人とか同意人にな

てもらったらどうか？ というようなことを言って、それで伯父さん以外にもう一人、彼の知人の方になってもらうことになりました。

彼の知人の方が「いつ、言ってくれるかを待っていたのに」というようなことを言っておられたのですが、彼の方からなかなか言えなかったのです。



**浅木さん**：彼は自分の大事な人だから、そんな自分のことで迷惑をかけたくないから、言えないのだ。というようなことを本人は言っていたのですが。その気持ちもわからないではないけれど、大事な、自分が大事な人だから、そういうときにこそ「あなたはどうか？ こういう考え方があるのではない？」と私たちが言ったのですが。

そのときに私たちが気をつけたのは、さっき平井さんも言ったのですが、私たちが全部お膳立てして「こうしたら良いよ。じゃこうしたらどう？」とこちら側から提供してしまうと、人のつながりが無くなってしまうので、私たちとしてはその人の関係をつないでいくためのサポートというか、その人自身のつながりで解決していく方法を考えてみようと思ったのです。

だから「私たちは保証人にも、同意人にもならないからね。あなたのつながりでやっつけていこうね。」というように確かめていきました。

周りの人なんか「どうして、あんたらそこまでやるのに、あんたらが保証人になれば良いのに。」とさんざん言われていました。

私らがやるとしたら、私らがどうするかを決めるのではなく、その人が「もし、命に関わるなり、そういう状態に陥った場合にどうしてほしいか。そういうことを全部、書面で残してください。そうじゃないと私たちは出来ない。」と言って、その本（講演で使った使った冊子）の中にもあるのですけれど、そういうふうな書面に残してもらったのです。そういう書面を作るにしても、私たちは何の知識もないので、弁護士さんの中に中に入れてもらいながら、こういう書類を作ってやってきました。

**平井さん：** こういう取り組みをするなかで、病院の医者なんかおもしろいことを言っていたのは、「地域であれ、施設であれ、人間一度は死ぬのだから、どこで死ぬかの問題であって、その人自身どういう生き方をしたいのか？ということが大事なのではないか？ということをおっしゃっていただきました。

彼自身が医者から手術の説明のなかで言われていたときに、病院に入院していたのですけれども、彼は家に戻ることを決断した時期があったのです。

**浅木さん：** 一日も早く手術をしないと、後遺症は厳しいよ。「早く決断してくれ。」と医者から強く言われていたのですけれど。本人さんは『いや、もしこういう死の心配がある状況であるならば、1回は家に帰りたい。自分は1回家に帰って友だちに別れを言いたい。みんなに「ありがとう」と言ってから手術したいから、1回家に帰りたい。』と彼は言ったのです。

最初から本人は「自分は手術します。自分は手術して良くなって、また歩けるようになったら、働いて結婚したいな。」「結婚した

いな」と言いませんけれど、「まず、働きたいんだ。」と言っていたので、「手術するものや」と周りのみんなはそう思っていたのですけれど、ぎりぎりになって「やっぱり、家に帰りたいんや。手術する前に1回家に帰りたいんや。」「えっ、早く手術しなければいけない」と言っているのに帰るの？

それに対して主治医の先生は「あなたの気持ちはよくわかった。本当は早く、一刻も早く入院して欲しいところだけど、2週間だけ待つ。2週間だけ家に帰っても良いけれど、それ以上は絶対ダメだからね。」というなかで、一回、家に戻りました。

**平井さん：** 彼自身の手術を受けるための会議をしようという話だったので、在宅に戻るための会議になってしまったのです。それで、彼が2週間のなかで自分が手術を受けても良い、と思えるようにはなったのです。



**浅木さん：** たぶん、家に帰りたいと気持ちもあつたろうし、「手術をやるのかな、やっぱりいやだな、怖いな」という気持ちの揺らぎもあつたと思うのですけれど、2週間の間で気持ちの整理をつけたのかな？ と今になっては思いますね。

**平井さん：** 僕たちがずっと関わりながら、今、まだ車いすなので、1ヶ月に1回か2回、勤めていた職場に復帰できないかということで行くようになっていきます。それで職場に毎日行って働けるかどうかという、まだ何とも言えないのですけれども彼自身が希望

する方向で、今は就労支援センターの人が一緒になって進めておられます。僕は障害者の方が施設を出て、地域に出て働きたいという方たちと、働く場所をいろいろ見つけながらやって来ているのですけれども。

これまで4～5名の方が地域で住んでおられます。また、富山市で身体障害者のグループホームを初めて作ったのですけれども、作ることによって在宅にいた方がグループホームに入られて、日中は作業所に通う人もおられます。

グループホームに3人入っておられるのですけれども、一人は作業所に通っておられます。一人は一般企業で携帯電話の部品などを作っているところに働きに行っておられます。もう一人は視覚障害の方で、マッサージをやっておられるのですけれども、その方は老人ホームでマッサージの仕事をされているのです。結構グループホームに入った人たちは一人一人、それぞれいろんな生き方をしておられます。僕らとしては、いろんな生き方をしてもらって、もっと良い生き方があればグループホームから出て、また新たな生き方をしてもらっても良いのではということやって来ている。

話が飛びましたが、彼との関わりのなかで思ったのは「選択」というときに、手術するか否かだけでなく手術をするのだったら、どういう結果になるのか？ どれだけのリスクがあるのかということも含めながら、彼に対してサポートしていくことが、すごく大事なことだと思いました。

後はやっぱり医者がすごく良かったです。医者が結構、診療内容について語ってくれました。僕らのような第三者が入ることによって、いろんなことを逆に聞くことが出来ました。彼はつらかったかも知れないけれども

「失敗したらどうなるの？ 成功してもどれぐらい良くなる？」ということも含めて。そのことが彼にとって「手術を受けてみよう」という決断にもなったかな？ というようなことを思いました。

だから、ご家族がいなくても、ある程度の支援の体制が取れば、取り組めるものです。

「身寄りがない」というのは僕もそうなのですが、（母親が13才の時に亡くなって、父親が30才の時に亡くなった）そういう意味では人ごとではありません。

僕自身が学んだことでもあります。そういうことで、僕は「人生の選択」というなかで、単に施設で生活したいか、自立したいかではなくて、やっぱり「どういう生き方をどこでしたいのか？」ということが一番大切なことだと思います。 終わります。



# 第14回はくい福祉まつり

☆テーマ：「こんなこといいな できたらいいな」

☆サブテーマ： ～他人(ひと)に思いやりを みんなにありがとうの心を～

(写真・文提供：羽咋市社会福祉協議会)

## 福祉まつりを開催しました

去る平成18年10月1日(日)、羽咋市文化会館や体育館を主会場として、はくい福祉まつりを開催いたしました。今回は82団体もの参加をえて、約8千人の来場者を迎えました。

羽咋中学校吹奏学部によるオープニング演奏で幕を開け、イベントや模擬店、そして体験コーナーなど、各団体のさまざまな催しで賑わいました。

はくい福祉まつりは参加団体のみならず、たくさんの方のご協力を頂いて開催していますが、今年は高校生のボランティアの参加が多く、頼もしい力を感じました。

今後も子どもからお年寄りまで、障がいのあるなしに関わらず、誰もが参加できるはくい福祉まつりを目指します。

## みんなで創る、みんなのまつりへ

当初は4団体から始まったまつりは、今年は82団体の参加がありました。また、当日は来られなくても、会場設営や後かたづけ、ポスター作り、畳や紙等の資材提供といった、「できるときにできること」をしてくださる方が年々多くなってきており、みんなで創るまつりになってきました。



みんな集まれ、開会式だよ。



羽松高校生徒による力強い太鼓打ち



さあ、どのお店へ入ろうかな？



みんな踊ろう、車いすダンス

## 編集者より

当日は編集者も参加し、参加団体のテント巡りや食べ歩き、車いすダンスの参加と楽しかったです。しかし、途中で車いすの空気が抜けて大変でした。

# 「ミナ・クル」バリアフリー探検報告

## 「ミナ・クル」探検隊

昨年10月2日(月)に、七尾市社会福祉協議会及び中能登町社会福祉協議会主催の「七尾鹿島地域ボランティア連絡会」のお招きを受け7月1日にオープンした七尾駅前第二地区市街地再開発ビル「mina.cle『ミナ・クル』」の「バリアフリー探検」を行いました。オープン当初から障害のある方にとって不便な箇所、危険な箇所が多くあると言われておりましたので、七尾市内と中能登町内の主婦・施設の利用者ら20名程が2班に分かれて探検を行いました。

まず、参加者のほとんどの方は車いすの利用が初めてなので、社協の方から車いすの箇所の呼び方、使用方法の説明を受けた後、車いすに乗って「ミナ・クル」館内を探索して歩きました。参加された方々からは、「建設計画当初に障害者団体から要望を出したのに、私たちの意見を全く取り入れられてもらえていない」「2階の駐車場からの連絡は急勾配な上、手すりもなくころびかけて危険な場面を多く見ている」などの意見が出され、当日も市の担当者に早急の改善を伝えました。

「ワークショップ野の花」代表・本田雄志さんが「これからも、不便な箇所の改善を求めて、誰でも利用しやすい『ミナ・クル』にしていきたい。」と語り、第1回目の「ミナ・クル探検」を終了しました。



車いすの取り扱い説明



2階市役所・福祉課

## 「ミナ・クル」について感じる事

- ①建設計画時はバリアフリーを基本にしていたのに、何故、障害者や子供・お年寄りの方にとり全体的にバリアが多く不便な建物になったのでしょうか？
- ②1階の身障者トイレにしても、表示がわかりにくく、通路の鉄のドアを一人では開けられないので実際には利用できない。
- ③床面がガタガタで手動車いすはこぐのに重いし、杖の人たちにはとても危険だと思う。
- ④2階の駐車場からの連絡は急勾配な上、両側に手すりもないので、手動車いすの方はもちろん、杖や老人車を利用している人や、子供やお年寄りまで滑りやすい靴を履いている人にとっては、転倒大事故につながりやすいので早急に改善して欲しい。

いろいろな問題がありますが、お互いに話し合っ、この「ミナ・クル」が子供からお年寄り、体の不自由な方、誰でも気軽に安全に利用できるようにして欲しいと思います。

平成18年10月2日

(七尾市青山町「青山彩光苑」在住)

桶屋 善一

## 桶屋さんと車いす体験 (2006年10月2日)

七尾市・本田 雄志  
(ワークショップ野の花所長)

七尾鹿島ボランティア連絡協議会主催で「ミナ・クル」のバリアフリー探検で青山彩光苑から桶屋善一さん他一名の方が参加されました。事前に車いすの説明を受けましたが、操作に戸惑いながらの体験で、さすが、桶屋さんの操作に見とれてしまい、挫折感を感じながらの私でした。

まず1階のトイレに入るとき、ドアを開けるのに両手が使えないと入れないのに気づき、二人で悪戦苦闘しながらドアを開けました。残念なことに桶屋さんは開けることができませんでした。次にエレベーターに乗り駐車場まで行きました。ドアは車いすでは開けることができず、健常者の方が開けてくれました。

障がい者が利用する福祉課のある場所へ行

くには手動の車いすでは勾配が強く、距離にして3mぐらいですがブレーキ役の介助が必要かと思いました。

建設計画時は事前に障害者団体への説明会があり、その時各団体がいろいろバリアフリーに対して、要望したにもかかわらず、目線をどこにおいての設計だったのか、未だに疑問を感じます。

体験を通して障害者の立場を理解することができました。健常者の目線ではなく、障がい者の目線で改善を求め、提案すべきだと思います。

2006年12月13日午前10時50分、国連総会で障がい者権利条約が採択されました。今後、国内法にどのように権利条約を生かしていくのか課題になります。(関連がありますので書いておきました。) まずは一歩前進です。



段差の確認



水洗ボタン位置が高く届かない。



坂で危険な床面



2階連絡通路 急勾配で手すりなし

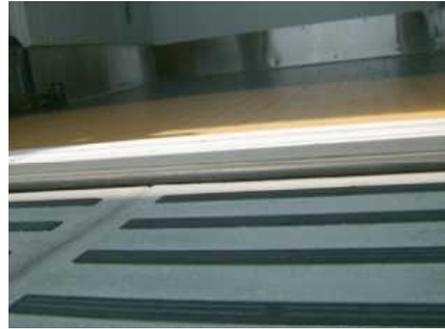
# 富山ライトレール「ポートラム」乗車体験

昨年10月13日～23日の「自立生活支援センター富山」で自立生活体験の一環として富山市内に新しく走った富山ライトレール「ポートラム」に乗ってみました。「ポートラム」は昨年4月から走っているマスコミなどに全国的にも有名になっている交通システムです。

私は始発の富山駅北口駅から終点の岩瀬浜駅までの往復に乗ってみました。ホームから車両への乗降、車内は全く段差がなく低底車両。車いす等の乗車がスムーズにできます。前と後の運転席の近くに車いす専用席が2カ所あり、車窓は大きく外への眺めは心地よい開放感を味わえます。

運賃はどこから乗ってどこで降りても、開業日から平成19年3月31日までは日中と休日の料金が半額です。大人100円、子供50円。

(報告: 桶屋・写真提供: 自立生活支援センター富山)



車いすが気軽に乗れる段差



車いす専用席



車両は個性を伝える7色。①赤、②オレンジ、③黄色、④黄緑、⑤緑、⑥青、⑦紫。



乗車口の段差はほとんどなし。



ホームのスロープ、全駅にあります。

編集して思っていたのですが、JR七尾線や北陸本線の全駅にエレベーターの設置は予算的に無理ならば、せめてこのようなスロープが設置されると、もっと気軽に外出できるのと思いました。

## ＝読者企画・食べ物談話＝

「食」とは「人を良くする」こと

管理栄養士・秋本 信子

「食」という字は「人を良くする」と書きます。この「食」にまつわる意味ですが、日本の古語と英語の「eat」では根本的に違うのです。そのことに気づいたとき、日本語の奥深さを改めてしりました。

古語の「食ふ」の意味は、「食べる・飲む」の他に、「口にくわえる」「かみつく、食いつく」ですが、それだけでなく、「うっかり信じる。だまされる」という意味もあるのです。『古きことながら、この手だて一度づつは食ふことなり（古くさい方法であるが、この術策に一度づつはだまされることである）』というふうに使っていました。そういえば、現代でも、外側から見た目は良くてもその実は良くない物や良くない人のことを「とんだ食わせもの」といいますね。一方的に相手を攻めるだけでなく、善と悪のわけへだてをしないうで、来るがままに受け入れる度量の大きさが、本来の日本語には含まれているのです。

ところが英語の「eat」が持つ意味は、「食べる」の他に、「食ってだめにする」「破壊する」「食い尽くす」「消費する」というネガティブな意味があります。（害虫などが）食って穴を開ける、食い荒らす。（酸が金属などを）腐食する。（病気などが）（体力・気力などを）消耗させる。さらに、「いらいらさせる、くよくよさせる」という意味も含まれます。相手が何かを悩んでいるようだった

り、気が動転して取り乱しているときに、

「What's eating you? (何を気に病んでいるの?何を悩んでいるの?)」というふうに使います。

健康ブームで、「食」の大切さが強調され「健康産業」が花盛りですが、栄養学というのは今からたった100年ほど前に進歩した学問で、それからほとんど目を見張るような進歩はしていないのです。「eat」に振り回されず、「食」を見直したいものですね。



「HSK季刊わたぼうし」のホームページ

<http://www3.nsknet.or.jp/~petero/>



## マイブックスルーム

### たった一度の人生だから

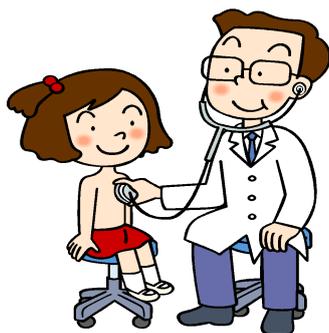
日野原 重明・星野 富弘著

発行所：いのちのことば社

定価：1,200円＋税

2006年陽春のある日、テレビなどでおなじみの聖路加国際病院の院長・日野原重明さんが星野富弘さんを訪ねての対談集です。

前半は星野富弘美術館を日野原重明さんが訪ねての美術館の設計から現在までの作品についての対談。後半は健康・医療・最近の教育・生きる目的について語り合う心温まる一冊です。



#### 年間協力会員募集中

この機関紙は障害のある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しています。

この会費は、在宅障害者宅や福祉関係等機関に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、主旨に賛同していただいている方々の年間協力会費として扱っています。

年間協力会費：2,000円

会費振込先：郵便振替口座

振込先名義：わたぼうし連絡会

00750-6-9791

送付：春、夏、秋、冬

#### 編集後記

新しい年を迎え、いかがお過ごしでしょうか？ 雪のないお正月でしたが、私は実業団駅伝と箱根駅伝のテレビを見ながら過ごしました。

さて、「障害者自立支援法」も当事者が声を出したことによって、少しずつですが負担が軽減されていっているようです。これからも見守って行きましょう。(Z.O)

#### 川柳裏表紙

支持率が どうであろうと 首相の座

小泉首相誕生の時も国民からの内閣支持率は高かった。一昨年の郵政民営化法案不成立で総選挙に出た首相。あの騒動の後に法案は成立したが、反対した造反組の復党問題など。

昨年の9月に発足した安部内閣の支持率も高かった。たとえ支持率は低くなっても総理(首相)の座は変わらない。要するに選挙で自分の党の議員を増やして第一党を守るかだ!! 国民の声も野党の声も気にしないのが首相の座だ!! 今年は参議院選挙の年だ。(比)

#### 編集及び連絡先

連絡先：zen@san9.net まで

定価二〇〇円